

## 今週のメニュー

■ [トピックス](#)

◇初開催の「無電柱化推進展」からケーブル保護管を紹介

■ [随想](#)

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(8)

木下 清隆

■ [編集後記](#)

## ■ トピックス

## ◇初開催の「無電柱化推進展」からケーブル保護管を紹介

7月22日～24日の3日間、東京ビッグサイトにて無電柱化推進展が開催されました。国土交通省によって進められている「無電柱化」に関する最新技術・製品・サービスに特化した展示会で、初開催となった今年は37の企業、団体が出展しました。この無電柱化と塩ビ管メーカーのクボタシーアイ(株)及び積水化学工業(株)の2社が出展した「ケーブル保護管」について紹介いたします。

国土交通省は、「景観・観光」、「安全・快適」、「防災」の3つの観点から無電柱化を推進してきています。昭和61年度の「電線類地中化計画」を始めとして、「新電線類地中化計画」、「無電柱化推進計画」に基づき整備を行ってきており、現在は、「無電柱化に係るガイドライン」に沿って進めています。このガイドラインでは、地域の実情に応じてコスト縮減が可能な手法も活用し効率的な推進を図ることとしています。

こうした国の方針を受け、東京都では、平成26～30年度の第7期計画では、東京オリンピック・パラリンピックまでに、おおむね首都高速中央環状線の内側エリアとなるセンター・コア・エリア内の都道の無電柱化を完了し、周辺区部や多摩地域での重点的な整備にシフトすることを主なポイントとし、計画距離は、都道717km、区市町村道199kmとしています。また、主要駅周辺では安全で快適な歩行空間を確保するため無電柱化と合わせて一体的に道路のバリアフリー化も図られています。

この無電柱化の主要技術は、電線類の地中化になりますが、ここで重要な役割を担うのが塩ビ製の「ケーブル保護管」です。収容する電線が電力ケーブルか通信ケーブルかにより2種類に大別され、電力ケーブル保護管はオレンジ色、通信用は通常の塩ビ管同様にグレーとなっています。いずれも共通して、塩ビ製パイプの以下のような特長を兼ね備えています。

- ・埋設管として経年変化がほとんどなく、また、耐酸性、耐アルカリ性に優れ土壌を選ばない。
- ・各種衝撃試験で実証される十分な耐衝撃性を有している。
- ・絶縁材料であることから、耐電圧性に優れ、電食や誘電加熱の心配がない。
- ・電気設備技術基準の難燃性試験に適合する「難燃性」を備えている。
- ・内面が滑らかなため、電線の外皮を傷つけず、ケーブルの引き込みが容易に行える。
- ・軽量のため取り扱いが容易で、施工がスピーディに行える。

加えて、オレンジ色の電力ケーブル保護管では、ケーブルが発熱し管の温度が上昇しても埋設管として十分な強度を発揮します。さらに主要管製品では、ゴム輪受口接続としていることから水密性に優れ、地盤の不等沈下にも追従する仕様となっています。



クボタシーアイ(株) 展示ブース



積水化学工業(株) 展示ブース

今回出展のクボタシーアイ(株)及び積水化学工業(株)の展示ブースでは、いずれも多種多様なケーブル保護管・継手、関連部材を紹介、また幹線道路を中心とした広幅歩道対応や幅の狭い歩道に設置対応する場合などの仕様別紹介と共に、電線地中化の重要なポイントとなるコスト低減策も提案しています。

昨年は、この無電柱化を推進する民間のプロジェクトも発足したようです。目にはみえにくいところではありますが、ライフラインの電気、通信の分野においても、今後ますます塩ビパイプが活躍の場を広げていくことを期待しています。

## ■ 随想

### ◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(8)

木下 清隆

<前回とのつながり>

前回は天照大神に関する直木孝次郎氏と、山尾幸久氏の所説を紹介をしたが、今回は、最後として松前健氏の論考を紹介することにする。

最後に、松前健氏の見解を紹介しよう。

氏は「天照御魂神考」(『国学院雑誌』一九六一年十月号)の中で、要約すれば次のようなことを述べている。

- a. 延喜式神名帳には天照御魂神という神格を祀る神社が畿内諸処にみられる。例えば、大和城下郡鏡作、同城上郡他田、摂津嶋下郡新屋、山城葛野郡木島等に見える天照御魂神社がそうであり、類似のアマテルを冠する神社には、丹波天田郡天照玉命神社、播磨揖保坐天照神社、対馬下県郡阿麻氏留神社等がある。この他、社名には見えないが、「天照」を名とする神格が祀られている神社も幾つかある。
- b. これらの神名に冠するアマテルという称号の意味や由来については、種々の学説があって定まっていない。皇祖神天照大御神のアマテラスという名を「高光る日の皇子」



伊勢神宮 内宮 宇治橋

のタカヒカルと同じく、「天にましまして照り給ふ意」であるとする本居宣長の説が一般に受け入れられていることから、天照御魂神のアマテルもその敬語を取らない形であるとしても良いと考えられる。

- c. 天照神、天照御魂神なる神名の多くは太陽崇拝と関係があるが、皇祖神とは異なる太陽神とみられ、古代においては皇祖神以外の日神崇拝もおこなわれていたと考えられる。
- d. 天照神、天照御魂神を奉斎する氏族は尾張氏、物部氏であつたらしいことが、古来種々の学者の認めるところである。尾張氏は<sup>ほあかりのみこと</sup>火明命を始祖とし、物部氏は<sup>にぎはやひのみこと</sup>饒速日命を始祖としている。この火明命と饒速日命を同一視する説があるが、異説の尤もなるものとされている。
- e. しかし、丹波の天照玉命、摂津の新屋坐天照御魂神、播磨の揖保坐天照神等は、火明命の後裔とされる即ち尾張氏と関連する氏族が奉祀していたらしいこと、大和の鏡作坐天照御魂神、<sup>おさだにます</sup>他田坐天照御魂神等は饒速日命の孫が祀っていたと見られること等から、同じ天照神を火明命と饒速日命の裔が祭祀していたことになり、これは火明命と饒速日命を同一神とする説は単なる創作ではないことを示している。
- f. これらの天照神は男性神格であつて、オホヒルメの神とは異なる神である。後世、天照大神を祀るとされる神社の中には、嘗てはこの神を祀っていたものも少なくない。

この松前健氏の説は、これまでの四氏の見解とは全く異なっており、先に述べた天照大神二神論が明確に展開されている。このような考え方は多くのアマテル神の調査から帰納的に導かれたものといえるが、なぜそうなのかという原因系が明らかにされていないのは残念である。これを明確にしない限り、この二神論の解決は出来ないといえよう。ここでの松前氏の指摘は先の岡田氏の⑭の内容と関連している。⑭にまとめているように岡田氏は「アマテル形容詞説」を展開することで、二神問題は存在しない立場を採っている。松前氏は、更に火明命と饒速日命の問題についても触れているが、これも二神論に深く係わる重要な問題であり、本考での天照大神二神論問題には、この火明命・饒速日命問題も包摂されているとの認識である。この問題は後でかなり詳しく検討する予定である。

以上のように伊勢神宮と天照大神に関する五氏の所説を紹介したが、その主要部分については、以下のようにまめることができよう。

- A. 伊勢と大王家との係わりは、雄略朝頃に始まった。(岡田・直木・山尾)
- B. 太陽神或いは日の神は、大王家の皇祖神或いは守護神とされていた。  
(岡田・津田・直木・山尾・松前)
- C. 伊勢神宮で祭祀されている大王家の守護神は、地方神が昇格したとの説(直木)と、遷座したとの説(岡田・山尾)がある。
- D. 遷座説にも二説があり、大王家の守護神を河内から遷した(岡田)と、三輪山の神を遷した(山尾)である。
- E. 天照大神についての見解は、巫女から昇格した女神である(岡田・山尾)、日の神がアマテル大神となったものでこれは男神である(津田)、天照神は男性神であり、オホヒルメの神とは異なる神である(松前)、との諸説に分かれる。
- F. 天照大神が誕生したのは天武朝である。(岡田)

以上、伊勢神宮と天照大神について、記・紀の内容と、岡田氏の説を中心とした古代史学上の所説を紹介し、これらを基に幾つかの結論を導き出した。ここに紹介した内容と結論を手掛かりに、これから橿田神社の祭神の謎を探求することにしたい。伊勢と博多とはどのような関係があるのか。大幡主命はいつ、何故、博多に勧請されたのか、素戔鳴尊はどのような神なのか、天照大神の正体は何か等、疑問と謎は止まる所がない。これらについて出来る限り明らかにしたいと思う。



伊勢神宮 内宮 五十鈴川

その前に、記紀の中で天照大神の女神・男神問題はどのように扱われているのかを簡単に整理しておくことにする。

## 【女神天照大神】

現在、天照大神は女神であることが一般的な認識となっているが、そのことは日本書紀の中での主張が普遍化されたものと考えられる。古事記の中では、そのような認識が散見されるが、明確には主張されていない。

書紀の中の、イザナギ尊・イザナミ尊による国生み物語の終わりの方で、

- 「吾已に大八洲国及び山川草木を生めり。何ぞ天下の<sup>きみたるもの</sup>主者を生まざらむ」とのたまふ。是に、共に日の神を生みまつります。<sup>おおひるめのむち</sup>大日靈貴と号す。一書に云はく、天照大神といふ。 —

といった記述が出てくる。この記述から大日靈貴が正式名称で、天照大神は俗称或いは通称と云うことになる。しかし、書紀ではこの記述場所以降、本文の中では専ら天照大神が使用されることから、意識的に<sup>おおひるめのむち</sup>大日靈貴が先ず導入されたといえよう。なぜ、<sup>おおひるめのむち</sup>こんな手の込んだことをしたのかという疑問が湧くが、先入観として女神のイメージを持つ<sup>おおひるめのむち</sup>大日靈貴なる名称を初めに出してきたのかも知れない。しかし、大日靈貴ではまだ女神なのか男神なのかは明確ではない。このため、更に後方でその説明をしている。それは神功皇后摂政前期に、

- 神風の伊勢国の<sup>ももつた</sup>百傳ふ<sup>わたらひのあがた</sup>度逢<sup>さくすず</sup>縣の<sup>ま</sup>拆鈴五十鈴宮に所居す神、<sup>つきさかきいつのみたまあまさかる</sup>撞賢木巖之御魂天疎<sup>むかつひめのみこと</sup>向津媛命 —

との補足説明が挿入されており、これで女神であることを明確にしている。伊勢神宮に坐す神といえば天照大神しかなく、その神の正式名称の最後が向津媛命とある以上女神だと云うことになる。このようにして、

<sup>おおひるめのむち</sup>大日靈貴 → 天照大神 → 女神

の構造が書紀においては明らかにされている。これが天照大神を女神とする仕組みであるが、天照大神の導入も、女神の導入もその方法は間接話法となっており、この点は注目される。要するに女神天照大神といった直接話法は何処にも出てこないのである。このことは女神であることを主張するのに、書紀の編者には何か深い躊躇いがあるように見える。  
(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)

「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

## ■ 編集後記

私が今住んでいるところの最寄り駅は東横線「学芸大学駅」なのですが、今は学芸大学のキャンパスがあるわけではありません。調べて見ると半世紀以上も前の1964年にはキャンパスは移転してしまっているようです。キャンパスがないのに駅名が学校の名前が残っているのは同じ東横線「都立大学駅」、西武新宿線「都立家政駅」などがあるようですがいずれの駅も駅名が地域に根付き、キャンパスがなくなっても地元の方の要望で駅名はそのまま残ったようです。

ちなみに、「学芸大学駅」の昔の名前は「碑文谷<sup>ひもんや</sup>駅」で、碑文谷（目黒区）は自然も多く、環状七号線と目黒通りのすぐそばで生活にはとても便利な住宅街です。

今回のメルマガは8月20日(木)の発行となります。(鷹山)

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)